

わきみず

発行者 曹洞宗
普門山 林泉寺
三戸町斗内字寺牛25
0179-25-2850

施食棚

すべてのいのちのこへだてなく

人は生きていくために食べ物が必要ですが、すべての命を大切にしながら、分かち合う心を大切にしなければなりません。曹洞宗では「生飯」という作法があり、食事を七粒ほど取り分けて、鳥や魚たちにも与えて供養するものです。命の平等を日々の生活で実践しているのです。そんな平等

2020年1月16日、日本で初めてコロナウイルス患者が出てから三年目、未だ終息の気配も見えず、再び新型が出て増加傾向にある。第7波の流行が懸念されます。残念ですが、今年も当寺では、感染拡大防止の為、「檀家さん参加の「盂蘭盆施食会」法要は、中止とし、住職、副住職だけで執り行うことといたしました。お盆の季節を迎えると、多くのお寺では「施食棚」を設けて法要が営まれます。「食を施す棚」という意味で、その法要を「施食会」と言います。

「生飯」という作法があり、食事を七粒ほど取り分けて、鳥や魚たちにも与えて供養するものです。命の平等を日々の生活で実践しているのです。そんな平等



で、こんなエピソードも伝わっています。アーナンダが背中に大きなはれものが出てきて苦しんでいた時のこと。名匠のジビカが「これは切り取るしかないが、その痛みは例えようもない」と診察します。そこでお釈迦さまは一計を案じます。お説法の時、アーナンダは一心不乱に聞き入っていることをよく知っていたので、アーナンダの通リアーナンダは集中して聞き入っ

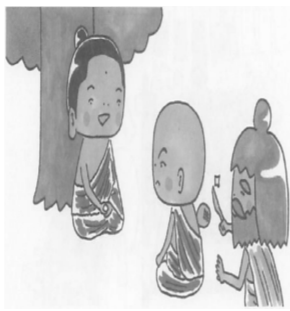
この鬼の話が『甘露門』に受け継がれていくのです。おかげでアーナンダは、何と一二〇歳まで長生きし、施食会をはじめ、多くのお釈迦さまの言葉をしっかりと「お経」にのこしてくださったのです。



おびえながら問い返します。「そんな：助かるでしょうか？」



くお唱えし、まわりのお坊さんがくりかえし「唵、三昧耶、薩怛𑖀𑖄！」「オン（信じます）。すべての生命（サト）と仏さま（バシ）は、完全な平等（サンマヤ）なのです！」



そんなアーナンダにある時、とても恐ろしいことが起こりました。一人で坐禅をしていた夜のことに、何と口から炎をはきながら恐ろしい姿をした鬼が迫ってきたのです。「アーナンダよ、おまえは三日後に寿命が尽き、鬼の世界に生まれ変わるだろう」

人うを生きる

カウンセラー相談室より

いのちつないでいくこと



彼は不登校や休学を経ながら大学を卒業しましたが、人間関係への不安の強さから就職をすることに足踏みをしている状況でした。人を信じられないという悩みを抱えていました。だから数年前、親御さんに背中を押されて訪れた相談室でもほとんど口を開くことはありませんでした。自分が関わることには「大きなお世話」と思っていた彼は、「カウンセラー」は「お節介な人」でした。そんな彼でしたが、一ヶ月に一回足を運ぶうちに自分の日常を話せる人がいる場所として相談室に馴染んできたようでした。

それは彼の悩みにもなっていました。病院通いが増えていく両親を案じつつも「何もできない」と言いながら彼はその愚痴を黙って聞いていたのです。両親の不安をそのまま引き受けたしんどさを相談室で吐くことは少なくありませんでした。ある時「親孝行ですわね」と言う私に「だって、そうしなきゃ（話をきくこと）家の雰囲気が悪くなるから、仕方ないです」と彼は困ったように、受け入れるような笑みを浮かべていました。彼にとって両親の「生老病死」他人事ではなく、日常の中で静かに感じられていて共に生きていくという実感に思えていたのです。



令和4年 春彼岸供養



先祖代々の読み込み

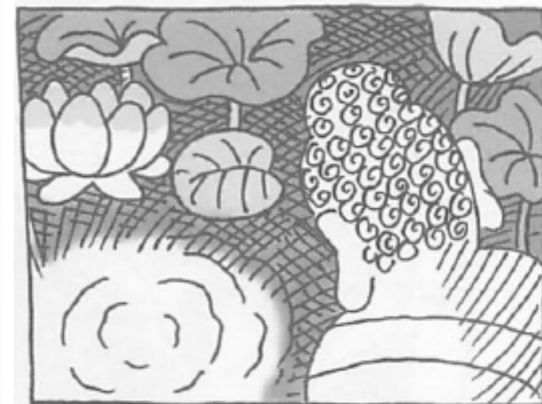
令和4年 新春ご祈禱



大般若転読



本堂正面の荘厳



それから...

